様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１１７７

研究課題名（和文）インディアン・カジノ時代における先住民社会のエンパワーメントの諸相

研究課題名（英文）Native American Empowerment in the Indian Gaming Era

研究代表者
野口　久美子（Noguchi, Kumiko）

明治学院大学・国際学部・准教授

研究者番号：００６０９５７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、文献調査と現地調査によって、カジノ産業を誘致したアメリカ先住民部族のコミュニティの変容過程と、カジノ収益金を戦略的に用いたローカルな先住民アクティビズムの実態を掘り下げて調査することができた。インディアンカジノ時代（先住民が保留地産業を用いて経済的発展を遂げ、政治的、文化的、社会的復権を達成してきた時代）は、第一期復権期であるレッドパワー運動期には達成できなかった「貧困」の克服を部族自治の主たる目的とし、かつ、入植者植民地主義がもたらした「排除の理論」を経済活動によって乗り越えようとする、先住民の第二期復権期として先住民史に位置付けられよう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は第一に、先住民カジノ産業の実態について、カリフォルニア州の複数の部族での現地調査を踏まえて調査を行った数少ない研究事例である。また第二に、1960年代以降の地域的、かつ国家的な先住民運動の着地点の一つとしてアメリカ先住民の経済活動を位置付けることにより、レッドパワー運動期（1960年代から70年代）を相対化し、さらにインディアンカジノ時代をアメリカ先住民史の現代史に位置付けた。以上の点において、本研究の先住民史研究、先住民研究における学術的意義は高い。

研究成果の概要（英文）：Through literature research and field research, this project investigated the transformation process of the Native American tribal community that attracted the casino industry and the actual situation of local indigenous activism using casino profits strategically. The Indian casino era (the era when indigenous people achieved economic development using reservation industries and achieved political, cultural, and social rehabilitation) sought to overcome the "poverty" in the tribal communities that was rarely achieved during the first restoration period, the Red Power Movement. The primary purpose of tribal autonomy in the Indian casino era was to resist the "theory of exclusion" brought about by settler colonialism through economic activities followed by political, social, and cultural self-determination.

研究分野：アメリカ史

キーワード：アメリカ先住民史　先住民研究　自治　カジノ　貧困　経済活動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
レッド・パワー運動がもたらした「インディアン・カジノ時代」において、カジノ部族は経済的成功を遂げ、その結果、合衆国における政治的、社会的影響力を高めた。元来、条約締結を根拠として特定の政治的、法的地位を持つ個々のカジノ部族は、今後、アメリカ主流社会における特定の経済的、社会的地位を獲得する「エスニック集団」へと変貌する可能性を秘めている。一方で、カジノ産業が過去半世紀にわたり先住民社会をどのように変化させたのかについては未だ明らかにされていない。それは、先住民史、さらには現代史におけるレッド・パワー運動自体の評価の欠如にもつながる。申請者は先住民カジノ産業の拠点であるカリフォルニア州の諸部族に関する研究に従事する中で、本研究の着眼点を得た。

２．研究の目的
　本研究は、1970 年代以降、アメリカ合衆国（以後、合衆国）において展開されてきたアメリカ先住民（以後、先住民）によるカジノ産業を通して、「インディアン・カジノ時代（1907 年代～2010 年代）」の先住民社会を複合的に分析することを目的とする。具体的には、カジノ産業を誘致した先住民社会における生活環境の変容（カジノ産業と先住民福祉との関係）、「インディアン・カジノ時代」の先住民、州、連邦関係の構造的変容、先住民カジノ産業と先住民アクティビズム（カジノ施設を舞台に展開されるコミュニティ活動と復権運動）を調査する。本研究は、カジノ産業を通して、合衆国において歴史的に継承されてきた特権的地位（自治権）を持つ先住民部族（以後、部族）の実態を明らかにし、最終的には「インディアン・カジノ時代」を先住民現代史に位置付けることを目的とする。

３．研究の方法
＜2018 年度＞
先住民カジノ産業と先住民福祉に関する実態調査
初年度は、カジノ関連の基礎文献、統計資料の収集に加えて 2019 年 3 月に 3 週間にわたり現地調査を行った。現地調査によって先住民カジノ産業が部族社会に与えた影響とカジノ産業に関する先住民社会の反応について明らかにした。具体的にはカジノ産業での収益が保留地における教育、衛生・医療、雇用状況、生活環境全般に与えた影響、さらには、同産業が開始された以後の部族議会の運営方法、保留地内自治、部族アイデンティティの変容過程とその背景、カジノ産業に対する世代間、地域間の評価の差異などについて、資料調査、アンケート調査と聞き取り調査を行った。その過程で、カリフォルニア州における現地調査（部族政府、インディアン保健局部族支局、部族教育施設、部族言語センター、部族博物館、部族商業施設＜コンビニ、ガソリンスタンドなど＞、各家庭訪問等）を行った。インタビュ―調査では、先住民カジノ産業の創設期から同産業の拠点となっているカリフォルニア州においてカジノ産業で大きな収益を上げる諸部族（カバゾン部族、ペチャンガ部族、トュールリヴァー部族、サンタ・ローザ部族、フーパ部族、ミヲーク部族）で、部族議会議員、長老者、スピリチュアル・リーダー、学生、女性を含めた部族成員を対象とした。また学会等への参加によって、同分野の研究者らとの幅広い意見交換を行った。

＜2019 年度＞
「インディアン・カジノ時代」の部族、州、連邦間のパワーバランスに関する実態調査
2019 年度は、カジノ産業と先住民社会を巡る政治的力学とその変容過程を明らかにした。特に、近年の先住民カジノ産業の成功に伴い、自治権やカジノ産業の利権を巡って、部族政府と州政府（カウンティー政府）との軋轢は高まり、その多くのケースが連邦司法判決に調停を求めている。本年度は、1980 年代から現代に至るまでにこうした三者関係（部族、州、連邦）を根本的に規定してきた司法判決（特に California v. Cabazon Band of Mission Indians, 1987, Carseri v.Salazar,2009）を巡る議論を事例として、カジノ産業をめぐる連邦制、州権、部族主権とその関係、そこに生じる軋轢やポリティクス、さらには、州、連邦に対する現代の先住民パワーの調査に取り組んだ。だが、図書出版とコロナ禍での海外渡航規制により、当初の研究予定に大きな変更を余儀なくされた。そのため、研究計画の修正を行うとともに、代替として（１）（２）を、さらに次年度の現地調査に向けた文献調査、資料調査として（３）を行った。
（１）4 月から 10 月にかけて①文献調査に加え、②電話やメール、Skype などを利用したインタビューやアンケート調査を行った。②については、カリフォルニア州の複数の先住民保留地内の博物館、カジノ施設、部族施設で働く部族成員、スタッフよりカジノ収益金を用いた部族文化復興の現状に関する実態や意見を収集した。これらの成果の一部は、本研究プロジェクトの途中経過として『インディアンとカジノ：アメリカの光と影』（ちくま新書、2019 年）に収めている。
（２）11 月 5 日から 7 日かけて①ハワイ大学で開催された American Studies Association の年次大会に参加し、博物館研究に携わる日米の研究者との意見交換を行った。また 11 月 7 日から 8 日にかけては②カリフォルニア大学デイビス校で開催されたアメリカ先住民研究学部設立 50 周年記念式典に参加し、本研究代表者が依拠する「アメリカ先住民研究の脱植民地理論」研究の

一つの拠点となった同学部の教員、大学院生と研究理論や方法論についての意見交換を行った。
（３）12 月から 3 月にかけては①インディアン・カジノ関係の一次資料と論文の収集、②比較研究の視点から日本におけるカジノ産業とアイヌの経済発展・文化復興に関する文献の収集、③またインディアン全国カジノ協会が発行するインディアン・カジノ産業の年次報告書の入手と情報整理を行った。また学会等への参加によって、同分野の研究者らとの幅広い意見交換を行った。

＜2020 年度から 2022 年度＞カジノ産業と地域・国家的な先住民復権運動に関する実態調査－アクティビズムの場としての「カジノ施設」
2020 年度には、、前年度からの課題として引き継いだ「インディアン・カジノ時代」の部族、州、連邦間のパワーバランスによる実態調査（主としてカジノ産業と先住民福祉に関する現地調査）に加え、カジノ産業と地域・国家的な先住民復権運動に関する調査を行った。特に、前述したカリフォルニア州の諸部族を対象に、カジノ場を含む先住民カジノ施設という「場」に着目し、そこが先住民社会や地域社会（周辺地域や他のエスニック・コミュニティー）の共同体的拠点、先住民知識人（全国アメリカインディアン協会や超部族的な環境保護運動、文化保護運動など）や先住民ミュージシャン、先住民芸術家の活動拠点、先住民の文化保護（博物館や歴史モニュメントの併設）の拠点として担う役割について分析・調査を行った。しかし、前年度に引き続き、コロナ禍における海外渡航規制や、報告予定であった学会の延期・中止などにより、当初の研究予定にさらなる変更を余儀なくされた。そのため、研究計画の微修正を行うとともに、代替の研究として（１）（２）を、さらにその成果報告として（３）を行った。
（１）本年度を通して①文献調査と②電話や E メール、Zoom などを利用し、カリフォルニア州とアリゾナ州の先住民部族の人々に対するインタビュー調査を行っ
た。①については、先住民の経済発展やカジノ産業に関する文献や論文の収集を行い、②については、特にコロナ禍における各部族のカジノ産業の運営状況と部族の経済政策に関するインタビュー調査を行った。
２）当初の研究計画には組み込んでいないが、アメリカにおける現地調査の代替として、より広い見地から本年度の課題である先住民の経済活動と文化復興に関する知見をえるため、さらにアメリカ先住民の事例と比較・分析するための史料収集のため、2020 年 11 月と 2021 年 3 月に北海道の二つのアイヌコタン（二風谷と阿寒）と 5 か所の博物館での現地調査を行った。
また学会等への参加によって、同分野の研究者らとの幅広い意見交換を行った。

＜2021 年度、2022 年度＞
本研究課題は 2 年間の延長期間を得た。この間、現地調査の機会も得て、二年目の課題「インディアン・カジノ時代の部族、州、連邦間のパワーバランスに関する実態調査」と三年目の課題「カジノ産業と地域・国家的な先住民復権運動に関する実態調査」に取り組んだ。またコロナ禍の先住民保留地に滞在し、実施調査をする機会を得たことによって、本研究計画作成時には予期しなかった、コロナ禍とカジノ産業の経済的打撃に関する調査も、上記の二つの課題に沿う形で取り入れることができた。特に、2021 年度 10 月から 2022 年度 8 月にかけて、勤務校のサバティカル制度を利用して、アメリカ合衆国に長期滞在し、コロナ禍において実施できなかった 2 週間×4 回分の先住民保留地における現地調査を行った。現地調査では、地域の資料館や博物館、また国立博物館等が、利用時間を縮小しながら利用可能となっていたので、計画的に資料調査を進めた。インタビュー調査は、主として、保留地内外に居住するアメリカ先住民の知識人（あるいは先住民研究に従事する研究者）、保留地に居住する部族政府関係者、保留地の一般住民を対象とした。そのうち、保留地外で研究者を対象としたインタビューは主としてカリフォルニア大学バークレー校周辺で対面にて行うことが可能であった。一方、主として保留地に居住する年長者に対しては、実際にコロナ禍での衛生対策や社会的要請の面からも、対面でのインタビューは当初の計画を大幅に縮小せざるを得なかった。一方で、コロナ禍で広まったオンライン会議は、保留地の部族政府など公的機関に加えて、保留地の一般家庭レベルで広まっており（例えば、地元医療機関や遠隔地の家族との連絡手段として）、部族政府関係者や一般の保留地成員についてのインタビュー調査をオンラインで実施することができた。

４．研究成果
本研究成果は以下の研究成果の刊行、報告でまとめた。

・野口久美子『インディアンとカジノ―アメリカの光と影』（ちくま新書、2019 年）
・Kumiko Noguchi “Keeping the Indian Tribal Community Together: Nation Building and Cultural Sovereignty in the Indian Casino Era,” *Japanese Journal of American Studies* no31 (2021), 133-156.
・野口久美子「アメリカ先住民の貧困と自己責任論―セルフ・デタミネーションと部族自治の罠」『大原社会問題研究所雑誌』第 762 号（2022 年），1-21.
・野口久美子「セトラーコロニアリズム（コラム）」(他 4 章担当)、梅崎透、坂下史子、宮田伊知郎編『よくわかるアメリカの歴史』（2021 年）.
・野口久美子「レッドパワー運動と環境―入植者植民地主義という環境破壊に抗して」『アメリ

カ史研究』第 45 号（2022 年），61-79．
・野口久美子「先住民の世界」（第 1 章担当）、遠藤秦生、小田悠生編『はじめて学ぶアメリカの歴史と社会』（ミネルヴァ書房、2023 年）．

・野口久美子「もう一つのレッド・パワー運動：インディアン女性活動家による『アメリカ的家族像』批判」（関西アメリカ史研究会、2019 年）．
・野口久美子「貧困との闘い：ポスト・レッドパワー運動期における経済活動とネオ・トライバルキャピタリズム」（アメリカ学会先住民分科会、2021 年）．
・野口久美子「『国家の悲劇、国家の挑戦』としての先住民の貧困―20 世紀連邦先住民政策における経済対策とその功罪」（日本アメリカ史学会年次大会、2022 年）．
・野口久美子「コロナ禍の先住民コミュニティ『不可視化』の暴力といかに戦うか」（アメリカ学会年次大会、2022 年）．
・野口久美子「北米アメリカ先住民社会の現在」（梨の木ピースアカデミー・コース 15、2022 年 5 月 13 日講義）．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 野口久美子	４．巻 762号
２．論文標題 アメリカ先住民の貧困と自己責任論――セルフ・デタミネーションと部族自治の罠	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	６．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kumiko Noguchi	４．巻 31
２．論文標題 “Keeping the Indian Tribal Community Together: Nation Building and Cultural Sovereignty in the Indian Casino Era”	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Japanese Journal of American Studies	６．最初と最後の頁 133-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野口久美子	４．巻 45
２．論文標題 「レッドパワー運動と環境―入植者植民地主義という環境破壊に抗して」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『アメリカ史研究』	６．最初と最後の頁 61-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　4件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 野口久美子
２．発表標題 「もう一つのレッドパワー運動：インディアン女性活動家による『アメリカ的家族像』批判」
３．学会等名 関西アメリカ史研究会5月例会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野口久美子
２．発表標題 「『国家の悲劇、国家の挑戦』としての先住民の貧困―20世紀連邦先住民政策における経済対策とその功罪」
３．学会等名 アメリカ学会先住民分科会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 野口久美子
２．発表標題 「コロナ禍の先住民コミュニティ『不可視化』の暴力といかに戦うか」
３．学会等名 日本アメリカ学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 野口久美子
２．発表標題 「コロナ禍の先住民コミュニティ『不可視化』の暴力といかに戦うか」
３．学会等名 アメリカ学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 梅崎透、坂下史子、宮田伊知郎　編集	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 202
３．書名 『よくわかるアメリカの歴史』（計5章担当）	

１．著者名 野口久美子	４．発行年 2019年
２．出版社 ちくま新書	５．総ページ数 301
３．書名 インディアンとカジノ：アメリカの光と影	

１．著者名 遠藤秦生、小田悠生　編	４．発行年 2023年
２．出版社 （ミネルヴァ書房、	５．総ページ数 416
３．書名 『はじめて学ぶアメリカの歴史と社会』（第1章担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関